



TOPIC 1 | 真空ガラスのJIS制定 窓の高断熱化に拍車

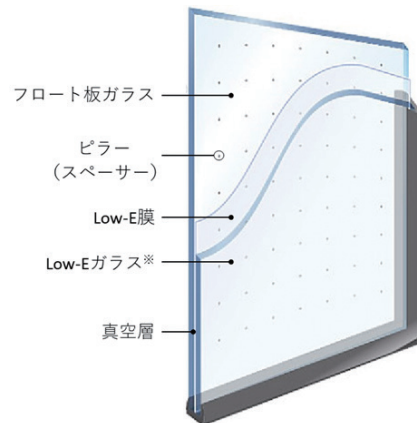
経済産業省が真空ガラスに関するJISを制定した。

真空ガラスは、2枚のガラスに挟まれた空間を真空状態に減圧することで熱を遮断する。断熱性能に非常にすぐれ、住まいの中で、最も熱の出入りの大きい開口部の断熱性能を向上させるガラスとして注目されている。真空ガラスのJIS制定により、製造者にとって一定の品質を確保しやすく、ユーザーにとって選択しやすい環境が整備されることで、窓の高断熱化に拍車がかかりそうだ。

制定した真空ガラスのJISでは、断熱性能を表す指標である熱貫流率を、JIS R 3107(建築用板ガラスの熱貫流率の算定方法)で規定する算定方法を引用して求める。国際規格による試験方法で実際に熱還流率を測定し、その測定値が、JIS R 3107による算出値と乖離していないことを確認する。また、断熱性能の区分については、複層ガラスに関する国内規格(JIS R 3209)の最高水準である熱還流率1.1W/m²K以下より、さらに高い断熱水準の0.7W/m²K以下を設定した。

下を設定した。

真空ガラスは、日本板硝子が「スペーシア」として展開しているほか、パナソニックが「Glavenir(グラベニール)」というブランドを立ち上げ、サッシメーカーのエクセルシ



真空ガラスの構造図

ヤノンが2021年6月にグラベニールを採用した樹脂サッシ「シャノンウィンドSPG」の発売を開始している。JIS制定により、改めてメーカー各社が展開する真空ガラスに注目が集まり、真空ガラスを用いて、住宅の省エネ性能を高め、快適な住環境を創出する提案が増えていく契機の一つとなりそうだ。

TOPIC 2 | 外装を木質化できる新たな木質材料が開発

外装を木質化できる新たな木質材料が登場した。

兼松サステックと住友林業は協業して、外装を木質化できる新材料「溝切加工合板」、「穿孔加工合板」を開発した。今回の新たな木質材料は、構造用合板に、兼松サステックが開発した防腐・防蟻薬剤「ニッサンクリーンAZN」を乾式加圧注入し耐久性を高め、さらに、住友林業が開発した木材保護塗料「S-100」を施し耐候性を高めることで、外装を含め外部で使用できるようにしたものだ。

「溝切加工合板」は、合板に深溝加工を施すことで、羽目板調パネルとして活用できる。小割の羽目板パネルなどを外装に使用するには、施工手間がかかるが、大判の合板を使用することで、施工の簡略化に寄与する。斜め、曲線など様々なデザインで溝を加工することで、意匠性を高

められる。

また、「穿孔加工合板」は20mmピッチで非貫通の孔を施したもの。必要箇所の穿孔部に鬼目ナットを設置し、複数個のボルトで固定することが可能。

例えば、天井面や壁面に、穿孔加工合板を設置することで、ハンモックをつるす、プランターを掛ける、といったユーザー側の様々なニーズに対応する拡張性を持った材料となっている。

両社の開発担当者らは、「新たに開発した『溝切加工合板』、『穿孔加工合板』を、多様なデザインの設計が可能な新材料として市場投入することで、合板の使用用途拡大、さらなる外装木質化市場の拡大を目指していきたい」と話す。

今知りたい情報がここにある

住生活産業のための
情報プラットフォーム

Housing Tribune Online
ハウジングトリビューン オンライン
プレミアム

<https://htonline.sohjusha.co.jp/premium/>